

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第 28 回 音楽芸術の不思議

音楽の不思議...随分前からそんなことを考えている。小生、きちんとした音楽教育を受けていない、単なるマニアに過ぎないが、クラシック音楽はかなり好きだし、無数となく楽曲も聴いてきた。昔、小学校の頃、所謂学校教育の中で、音楽は「芸術」というジャンルで教育されてきた。モーツァルトの音楽を幼い頃から「教育」として学ばされる国は、(正式な音楽教育以外では)あまりないかもしれない。

「芸術」というならば、セザンヌやモネ、ドラクロアが描いた絵画そのもの、あれは正しく「芸術」である。好き嫌いはもちろんあるが、誰が、どこで、何時見ても、モネの絵はモネの絵である。そのプロセスは、至極単純で、小説 文章芸術 であろうと、建築であろうと、直接目で見、心で感じる形而上のものが、作者 芸術家 からダイレクトにインプットされる。これなら分かりやすい。

ところが、音楽はちょっと違う。J.S.バッハやベートーヴェンは素晴らしい音楽として「楽譜」を残している。おかげで数世紀後世の我々も、その楽曲を聴き、楽しむことができる。しからばその「楽譜」は「芸術」といえるだろうか...? 我々凡人が音楽として認識するには、あの五線譜を読み取り、楽器で奏で、リズムとハーモニーを合わせて初めて「音楽」になる。多分、多くの方は、あの楽譜からは、何も聴こえてこない。

元々モーツァルトがいて、譜面があって、演奏家やオーケストラがいて、それを統括する指揮者がいて、ここで初めて「音楽」となって我々の耳に響いてくる。そこには例えば「絵画」の世界のような、単純なプロセスとは異なってくる。だから恐らく、...誰が、どこで、何時...と言うことが、実はとっても重要になってくる。つまり、同じベートーヴェンの交響楽曲第五番も、トスカニーニかバーンスタインか、ウィーンフィルか埼玉交響楽団かによって、全く異なる音楽になってしまう。音楽に限らず、あるいは演劇や映画も同じプロセスかもしれない。そうつまり、作者一人だけの芸術作品はありえない世界である。

実に実に、どうでもいいことだが、忙し過ぎる毎日の中で、「音楽芸術」の不思議さに囚われてしまった。ベートーヴェンといえども、たった一人では「音楽」を作り得ない。多くの人の技量を集約し、役割分担の見事なまでの分業・協力体制の上、強力な指導力によって、あの芸術的な「音楽」が響き渡る。

一世紀前の演奏家も現在も、同じ掟に従い同じ目的に向かって、一致団結して音楽を作り上げる。ただ指揮者だけは、今風の音を求め、今どきの聴衆好みを模索しつつ、自分の主義を主張せんとする。それが時代に受けた時、人には「芸術」として感動を呼び起こす。これはもう、我々が毎日悪戦苦闘している「経営」とあい通じるかもしれない。